様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０８２００５２
研究課題名（和文）　明末清末の白話短篇小説集の出版および収録に関する研究

研究課題名（英文）　A study on publishing and editing about some collections of colloquial short stories from Last of Ming Period to first of Qing Period

研究代表者
廣澤　裕介（HIROSAWA YUSUKE）
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：２０５１３１８８

研究成果の概要（和文）：
中国の明代末期に流行した、当時の口語を元にした文体で書かれた『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』という短篇小説集がある。その明代を舞台にした物語を分析して、それぞれの小説集の特徴を指摘した。『警世通言』には明代を舞台にした物語が１２篇あり、そのうちの９篇が江南地域と強い関わりが見られ、この傾向はほかの小説にはない。また明代の科挙を題材にした物語で比較すると、それぞれに独特の特徴が見られる。３つの小説集は一つのシリーズと見なされてきたが、その編纂意図には相違があることが分かる。

研究成果の概要（英文）：
I study on some collections of colloquial short stories in Last of Ming Period with analyzing some stories set in Ming period included in “Gujinxiaoshuo 古今小説”, “Jingshitongyan 警世通言” and “Xingshihengyan 醒世恒言”, and explain each distinctions of these collections.
“Jingshitongyan” includes twelve stories set in Ming period, and nine of them have close relation to Jiangnan 江南 region. This tendency isn’t bried (can’t be found in) other collections.
And by making a comparison with the stories depicting Keju 科挙 included these collections, it becomes clear that each collection has distinctive characteristics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,380,000	414,000	1,794,000
2009 年度	1,230,000	369,000	1,599,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,610,000	783,000	3,393,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：短篇白話小説集、『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』、編纂意図、読者、読み方

１．研究開始当初の背景

中国の明代末期に成立した短篇白話小説集『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』の３書は、従来馮夢龍という人物が編纂した、のちに「三言」と呼ばれる一つのシリーズであると認められてきた。これらの小説集が日本で発見されて以来、その認識は特に批判、検証されることなく、一種の定説となり、それを前程に、日本をはじめ中国、台湾などでも多くの研究が重ねられてきた。よって、これらの３書には馮夢龍の文学思想が貫かれており、これらを研究することで、馮夢龍の文学思想が理解できるとしてきた。

しかしながら、筆者がその３書の現存版本を詳しく調査してみると、それらが一つのシリーズであったと認めるに十分な根拠を見ることはできなかった。それらの現存版本は、形こそ似てはいるが、みな別の業者から出版され、編纂者と思しき人物の筆名も異なっているのである。そして『古今小説』にいたっては、通説となっている馮夢龍ではなく、明代末期に政治や出版の分野での活動が確認される葉有聲という著名人が深く関わっていることが明らかになった。とすれば、「三言」と呼ばれている３つの小説集は、それぞれの成立当初はシリーズではなく、別々に編纂・出版され、その後に出版業者の都合によってシリーズとして売り出され、広まっていったという可能性が考えられるわけである。これら３つの小説集が別々の傾向や特徴を持っているとすれば、その可能性を補強することになる。

筆者自身、これまで版本研究という角度から、３つの小説集を出版物と出版業者の活動の面から分析してきた。科研費を得たこの２年間は、作品の内容に対して分析をするという、これまでにできなかった研究方法を採る大きなチャンスであった。

そもそも「三言」に収録される作品に共通する特徴や傾向については、これまで非常に多くの研究が重ねられてきた。

例えば、明代末期には「三言」のほかにも、凌濛初が編纂した「二拍」と通称されるシリーズ『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』があり、稲田孝氏は「三言」「二拍」中の作品の舞台となる地域について、「蘇州或いはその近辺を舞台にしたものが多い」と指摘している。稲田氏の指摘はあくまでも全般的な印象を論じて、この時代の小説集には蘇州に関わる物語が多いといっているようである。しかし、「三言」に関していえば、蘇州に関わるものは３書にバランスよく収録されているのではなく、多く収録する集と、そうでない集があり、偏在しているように見える。

また古代中国の官吏任用制度である科挙という題材についても、「三言」の収録作品に関しては、澤田瑞穂氏以来、山口建二氏、荒木猛氏ほか、多くの参考にすべき先行研究がある。ただ、それらの研究はすべて３つの小説集の全体的な特徴をいったもので、それぞれの小説集に独自の傾向があるか否かという問題にまでは、到達していないのである。

筆者はこれまで「三言」関連の各版本とその出版状況を研究してきて、『古今小説』の成立については、すでに論文「古今小説と葉有聲」を発表し、他とは成立状況が異なると指摘した。それゆえ、次に主として考察すべきは第二集の『警世通言』である。

『警世通言』についても筆者はかつて論文「兼善堂本『警世通言』の成立――長澤規矩也氏の問題提起に対する一回答」を発表したが、そこでは出版業者の出版や編纂の意図についてはごく簡単にしか触れることができなかった。小説集の内容に関わる本格的な分析は次なる課題として残したままであった。

この２年間では、これらの問題意識から、「三言」の文学的分析を進め、「三言」というシリーズの成立状況をより深く知る重要な時期となった。

筆者が考える「三言」成立に関わる仮説がもしも誤りであった場合でも、これらの小説集は江戸時代の日本にも大きな文化的な影響をあたえたものである。そのため、それぞれの持つ傾向や特徴について理解を深めることは、中国や日本の文化現象を考える上で、非常な重要なものになることは間違いない。

２．研究の目的

『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』の３つの小説集が、それぞれに別個の傾向と特徴を有していることを明かし、その傾向と特徴をについて詳しく探ることが目的である。特に『警世通言』が『古今小説』『醒世恒言』と異なる性格を有していることを証明することである。

『警世通言』の収録作品の一つ一つを精査し、作品の舞台になっている地域との関係を明らかにする。この小説集を編纂した人物がどのような意図を持って、どのような人々に向けて世の中に送り出したのかを検討する。

また、科挙についての描き方が、３つの小説集で異なるか否かを検証し、異なる場合は何が決定的に違うのか明らかにする。また、科挙を描いた物語から、読者たちの視線や思考を浮かび上がらせ、当時の人々の読み方が

どのようなものであったか、小説の作者は読者とどのような関係を結ぼうとしているのかを読み解く。

３．研究の方法

まず『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』の明代を舞台にした作品を選び出した。明代を舞台にした作品に限定するのは、それらの作品が基本的に明代に起こった出来事とし、それを執筆した人物が明代の人であり、それを読んだ人も明代の人であるからである。読者たちは作品の内容を、自分たちが生き、生活している時代と同じ明朝での物語と捉え、それよりも前の王朝を舞台にした物語よりも身近さを感じていたはずである。明代を舞台にした作品を分析することは、明代の人々の日常的な感情、生活感覚、または明代の社会を理解することにつながる。

明代を舞台にした作品を選び出した上で、次の二つの方法を採った。

一つ目の方法として、明代を舞台にした作品の舞台になっている地域について分類をおこなった。その過程で、『警世通言』の収録作品では蘇州府と揚州府が舞台になることが多いとわかり、そのことが意味することとそれぞれの作品とその地域との関わりを詳細に検討した。蘇州府に関わるものとして、巻２２・巻３４・巻３５を詳しく取り上げた。揚州に関わるものとしては、巻５・巻１１・巻２２・巻３２を取り上げた。それぞれの作品の来歴や場面描写、社会背景などについて様々な分析を行った。

二つ目の方法として、物語に科挙が関わっている部分を選び出し、科挙の描かれ方と物語における役割について、３つの小説集を対比しながら分析した。『古今小説』では、明代を舞台にした物語で積極的に科挙を描くものがないので、明以前の時代を舞台にした巻２３や巻３４などを、参考として分析した。『警世通言』では、主に巻１７と巻１８について詳しく作品分析し、その物語の特徴と来歴に関する問題について考察した。また『醒世恒言』については、『古今小説』『警世通言』には見られない、新たな傾向を持った巻２１を中心的に取り上げた。その作品分析から、当時の知識人社会の情勢を照らし合わせ、また明代のこの作品の読まれ方、作者と読者との関係について考察をおこなった。

４．研究成果

『警世通言』には、明代を舞台にした作品が１２篇あり、これは収録作品の３割に当たる。その１２篇のうち江南地域にある蘇州と揚州に関わる作品が合わせて９篇ある。蘇州に関わる作品が５篇あり、揚州に関わる作品が６篇、またこれには１つの作品の中で蘇州と揚州がともに関わるもの２篇が含まれている。

その蘇州に関わる作品における、蘇州近辺の土地や風習に関わる記述、また物語の変遷の過程から、この小説集は蘇州を中心とした江南地域の人々を読者として想定している可能性が考えられる。読者たちは、なじみの深い地域で展開する物語に興味を覚え、また華やかな文化の中心地であった蘇州にあこがれを抱きながら読んだと思われる。

また揚州に関わる作品においては、その府下の瓜州や儀真などの港湾を舞台にするものが多く、そこはいくつもの水上のルートが交わる、南北中国の分界地域である。その地理的な特徴が物語に反映され、人々の出会いと別離の土地として、また登場人物たちの心理におおきな変化が起こる場所として、物語の大きな転換点となることが多い。そこには裕福な揚州商人や小さな利益に敏感な操船業者たちの姿が刻銘に描かれ、金銭の街としての揚州が描かれている。この小説集の主な読者が蘇州の人々であったとすれば、金銭の街である揚州に対して、羨望と軽蔑の念を持っていたことが推察される。

また、１２篇のうち、蘇州や揚州に関わらない３篇の作品については、いずれも科挙が物語に重要な役割を持っていることが特徴であった。

このような収録する多くの作品が、蘇州や揚州と強い結びつきがあるという特徴は、『古今小説』や『醒世恒言』にはみられない、『警世通言』に特有の現象である。「三言」は一つのシリーズと見なされ、これまでの多くの研究はそれらに共通するものを指摘してきたが、一つ一つの小説集単位で丁寧に精密な分析を加えることで、個々の特徴を持つことが証明できた。

また、「三言」の各小説集における科挙の描き方を分析した結果次のようなことが分かった。

まず『古今小説』の明代を舞台にした作品では、科挙を主要なテーマとしてあつかったものは見られなかった。『古今小説』の編纂者はそのような作品を一篇も採用することはなかったのである。描き方の特徴としては、物語の最後の場面で、主人公やその周辺の人々の幸せを象徴する定型的な表現が多く、物語の展開に深く関わっていないことが確認できた。『古今小説』の中で科挙を大きく描くものは、宋代を舞台にした作品が多いが、それらはいずれもリアリティの少ない、おとぎ話のような内容になっている。これらは、『警世通言』や『醒世恒言』には見られるもので、科挙を描いた物語の伝統的なタイプと思われる。

「三言」の第二集とされている『警世通言』

の中には、科挙を詳細で写実的に描く作品があり、それらは近世の白話短篇小説の傑作とされている。特に、物語の中盤に描かれて、主人公の人生が大きく変わる転機となり、物語の展開に大きく関わっている。これらの作品は、知識人が滑稽な役回りとなり、おそらく旧来からの芸能の影響を受けているのだと思われるが、それが文字化されて小説という形式で『警世通言』に収録されたことは、知識人を描いた後世の作品に重大な影響を与えたと思われる。

『醒世恒言』については、『古今小説』『警世通言』の科挙を描いた作品とは、別種の問題を持つ巻２１を中心的に取り上げた。この作品の主人公である「楊延和」は、この小説集が出版される１００年ほど前の大物官僚であった「楊廷和」とイメージをダブらせて書かれており、それを息子が科挙に合格した年をヒントにして、理解させようとしている。絶体絶命のピンチに陥った若い書生が才色兼備の少女に助けられて、その後に結婚をするという物語にはほとんど意味がなく、「楊延和」が「楊廷和」をモチーフとしていることを読者が理解できるか否か、作者は一種のクイズを出しているのだと考えられる。このような特徴を持った作品はほかに例がなく、科挙に関する知識をベースにした、知識人社会の一種の遊びが反映されている作品のようである。科挙が作品の大きなテーマになってはいないが、科挙文化を背景とした希少な作品であるだろう。

蘇州や揚州などの江南地域との関わり、科挙という題材の扱い方から見ると、３つの小説集はそれぞれに別々の特色を持っていることが理解される。これは３つの小説集にはそれぞれ個別の編纂意図があり、むろん同時期に成立しているために多くの共通点を持ってはいるが、１人の編纂者が作ったものとするならそれぞれに別の意図があったか、あるいは３つがそれぞれ異なる編纂者によって作られていると考える方が妥当なのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①著者名：廣澤裕介、
論文表題：科挙を描く明代短篇白話小説――『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』から、
雑誌名：立命館文学、
査読：なし、
巻：６１５号、
発行年：２０１０、
ページ：１８－３７

〔学会発表〕（計１件）
①発表者名：廣澤裕介、
発表表題：明代を舞臺にした短篇白話小説の中の科擧、
学会名等：藝文研究会、
発表年月日：２００９年１０月２５日、
発表場所：立命館大学衣笠校舎清心館中国文学専攻共同研究室（京都府）

〔図書〕（計１件）
①著者名：廣澤裕介（共著）、
出版社名：汲古書院、
書名：明人とその文学、
論文表題：明末の蘇州と揚州の物語――短篇白話小説『警世通言』から――
発行年：２００９年、
総ページ数：２５（１６９－１９４）

６．研究組織
(1)研究代表者
廣澤　裕介（HIROSAWA YUSUKE）
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：20513188